

---

# 手をつなごう!!

NAO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

手をつなごう！

### 【Zコード】

Z4309A

### 【作者名】

NAO

### 【あらすじ】

私の彼は、手をつないでくれない。すれ違う恋人が迎えた結末とは？

私の彼は、手をつないでくれない。

恋人になつたら、当たり前のように手をつないで、幸せな一人を町中に見せ付けてやる、なんて思つたりしていたのに……。

私は、今日も隣を歩くだけで、手をつなぐことができないでいる。勝手に手をつないでしまつたときは、まるで濡れた手の水を払うかのように、私の手を振り払つた。

あの時は、ショックだつた。

「ひどいよ、祐一。私たち、恋人だよ？」

「……悪い」

目と目を合わせずにつぶやく。

「あ、別に、怒つてはないんだよ？ 分かつてくれれば……それで……」

惚れた弱み、その言葉を唇でかみ締めた。

祐一は無口で不器用だ。それは付き合う前から分かつてた。どこか遠くを見るような眼差しで、時々口にする言葉は深遠でそういうところに私が一方的に惹かれてしまつた。

付き合う前、近くで彼の声が聞こえたときは、それだけで胸が爆発しそうになつた。低くて、渋い、吐息が漏れるような声。時々しか聞けないその声。

だから、恋人になつたらどんなに素敵だろうつて、ずっと考えていた。

そして、せつかく恋人同士になれたのに、祐一はあまり変わらな  
い。

私だけが浮かれて、あたふたしてる。

もしかしたら、もう私のことを好きではないのかな……。

そんなことは、もう数えられないほど繰り返し考えた。寝る間も

惜しんで考えた。

祐一の気に触るようなことをしたのかな、とか。

祐一が誰か他の人を好きになつたのかな、とか。

私の身体的特徴から、料理の味付け、果ては家系まで。どんな小さな可能性も探つてみた。本当に自分が醜いと思つ。祐一の身辺調査、聞き込み調査、まるで警察がやるそれみたいに、私は調べて回つたのだから。

でも、答えは出なかつた。

「ねえ、祐一」

祐一は無言でこちらを振り向く。笑顔なんてない。

「ん……なんでもない」

私は祐一の機嫌を損ねるんじゃないかと思つて、聞くことができない。

のどまでかかつた台詞を飲み込んでしまつ。

どうして手をつないでくれないの？

何度も一人で声を出して練習して、臨んだ本番。やつぱり駄目だつた。聞いてしまつたら、一人が終わつてしまつような気がしたから。恋人同士でいられなくなつてしまつ気がしたから。

私は一人の恋愛貯金をずっと切り崩して過ごしているんだ。貯金が尽きてしまえば、そのときは、きっと終わつてしまつ。だから私は、嫌われないようになつて、嫌われないようになつて、貯金を少しづつ少しづつ使つている。少しでも長く、祐一との恋愛が続くように祈りながら。

彼の顔色をうかがつて、言葉一つに神経を注いで、彼好みの服を着て、話し方だつて……。

全部、彼をつなぎとめておくため。彼に好きでいてもらつため。だから、手をつないでもらつくり、我慢する。私の夢だつたけど、でも、彼が好きでいてくれるなら。

「……熱でもあるのか」

低い声が聞こえてきた。彼の声だ。田は前を向いたままだけど、私を心配してくれてる。

まだ付き合つていられる。心配してくれているのだから。

私は少しだけほつとした。

「ううん、平氣」

私の言葉を聞いてそれきり黙つてしまつ。周囲にはどう見えているのだろう。しつこく付きまとう女、かな。私つて醜い。こんなのが恋人じゃないよ。

私は考え込んでしまう。何度も何度も、自問自答して、原因を究明する。でも、確かなことは分からなくて。それで、悪いほうへ悪いほうへ、考えは行つてしまつて、戻つてこれなくて。

そして

「……あれ、私……」

私はベッドの上に横になつていた。額には濡れタオル。

「知恵熱……？」

頭がぼつつとする。看病してくれた彼がベッドに背中を向けて、安らかな寝息を立てていた。

自分が自分で馬鹿らしく思えてくる。

空回りだ。情けない。きっと嫌われた。

恋愛貯金は、この看病で使い果たしたに違いない。

好きだから、大切だから、看病してくれたんじゃない。同情で看病してくれたんだ。

涙が出てそうになる。田に涙が溜まつていって、今にもこぼれそうだ。

私は、彼に涙を見られて嫌われる前に、涙を拭つてしまおうと、手を田元に持つてこよつとする。

しかし、涙を拭うことはできなかつた。

私の手は、暖かくて、大きなものに握り締められていたから。

掛け布団を取ると、そこには彼の手があつて、私の手をしっかりと握っている。思わず涙の色が変わってしまう。

「……起きたのか」

彼が握っていた私の手を離すと、私は体を突き抜けるような幸福感から開放されてしまう。

「……どうして？」

彼は答えない。

「私のこと、嫌いなの？ だから、つないだままでいてくれないの？」

ダムが決壊する。

「嫌いなら、嫌いだつて、はつきり言つて！ 別れたいなら、別れたいつて、はつきり言つてよ！」

彼の胸を叩く。

祐一のことがまだ好きだ。どうしようもなく好きだ。

だから、少しでも彼の心を動かしたくて、何度も何度も彼の胸を

叩いた。

「……す……んだ」

彼が何事かをつぶやいた。私は、直感的に別れの言葉だと思った。終わってしまう。私と祐一の時間が。今、ここで。時計の秒針が時を刻み、針の動く音が、私の心を刻む。そして、祐一が口にした言葉。

「……恥ずかしいんだ」

「……」

「え？」

数秒の沈黙の後、思わず間の抜けた声が出た。

「恥ずかしい？」

「……ああ」

「た、たつたそれだけ？」

「……それ以外に何がある？」

「このあと、嬉しさのあまり祐一に往復の平手打ちをしたことは、言つまでもない。」

(後書き)

評価、感想、栄養になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4309a/>

---

手をつなごう!!

2010年10月8日15時43分発行